

最年少優勝へ技磨く

祭りなき
夏再び

秋田竿燈まつり

「妙技会での団体規定優勝と個人での最年少優勝、その目標は気持よくを切らすことなく、ふれることなく持ち続けています。」

竿燈まつりのない、2年目の夏。駅東竿燈会の差し手、鈴木太郎さん（16）秋田工業高を「強い気持ちを持っていない。」

駅東竿燈会・鈴木太郎さん



幼稚園に通っていた頃、竿燈が始めて夢中になった。ほうきやちわなを棒がついているものを見て手のひらに乗せ、バランスを取るようにうれしかった。小学生になっても、土日は大町の民俗芸能伝承館へおそり流し籠に通い詰めた。必死になつて練習した。

小柄ながら巧みにさおを操るの姿は、いつしか竿燈まつり見物客の注目を集めるようになっていた。

高校生となった昨年4月、竿燈まつりの中止が決まった。それでも練習に励んだ。「自分の足りない部分を磨きたい。演じることにすつと

連続中止にもおれず



今年4月、秋田市の秋田拠点センター・アルヴェで練習をする鈴木さん（提供写真）

「部活が終わる時間と竿燈の練習が始まる時間が重なっていたので、思うようにならない難しさもあった。両立しなかった。この夏こそ竿燈を上げたい、という思いがあった。」

今年5月、2年連続の中止が決まった。

いつもの夏なら会場に設置されているはずの観覧席がない。おはよしの音がしない。「寂しい」

7月初め、剣道の練習中に右足を痛めた。「竿燈がない年にけがをし

怖さを感じていた「額」の技を服するなく、技を磨き続けた。

高校では剣道部に所属している。

「来年は頑張りたい。応援してくる全の人の期待に応えられよう。」

「松葉つえを突きながら、そう語。妙技会の演技を締めくくる「腰」の技が得意だ。けれど「演技が近づく」と、ブレスジャーとストレッチで肩脇炎になることもある」。あの興奮と緊張感。竿燈の全てが自分を育ててくれたと感じている。

（加藤広太）



「右足を使えないので他の部分を鍛えたい。」

来年度の竿燈まつりを見据えて語る鈴木さん

竿燈の演技をまね、額に棒を乗せる小学2年の頃の鈴木さん（提供写真）

毎年の声援、活力に

「太郎君は竿燈まつりの中止をどう思っているのでしょうか？」。駅東竿燈会の鈴木太郎さんを取材するきっかけとなったのは、竿燈ファンの男性から本紙に寄せられたメールだった。

1年目の竿燈中止が決まった昨年4月、そのメールは届いた。男性は毎年、竿燈まつりに通う中で「太郎君」に出会った。小柄ながら堂々と演技する姿を、応援せずにはいられなかった。竿燈会場で再会すると会話を交わすようになり、竿燈に対する「太郎君」の熱い思いも聞いたのだという。

昨年4月、鈴木さんは本紙の取材で「大君の妙技会に出られるチャンスだったのに」と悔しさをのぞかせていた。次に竿燈まつりが開かれたら「頼れる差し手として、団体が優勝したい」とも語った。そうした思

本紙にメール 「太郎君」の思い知りたい

いは記事にも掲載された。

そして、今年7月。「太郎君」を応援している男性から、再びメールが届いた。文面には「彼がどんな思いで今年の夏を過ごしているのか、『竿燈まつりの大ファン』として近況を知りたい」とあった。

男性からのメールについて伝えると、鈴木さんはうれしそうに感謝を口にした。

「皆さん、自分が小学校低学年の頃から毎年応援し、激励してくれている。『来年も見に来よう』と言ってくれる。それが来年の技術向上へのモチベーションにつながっています」

幼い頃から夢中で竿燈を上げてきた。その姿に多くの観客が声援を送った。そうして、一つ一つの夏を積み重ねてきた。

「今は、年下の人に伝統を受け継ぐことの素晴らしいさを教えていくのも、自分の役目なのかなと思っています」。16歳になった「太郎君」の言葉だ。